

マスターズを彩るレジェンドたち(31)

暦の上では2月。本誌の表紙は3月号だが、2月2日は節分だった。マスターズの皆さんは豆まきをして邪気を払ったはず。今年は節分の翌3日が“春に入る”の立春だ。11日の建国記念日が過ぎ、14日は男性にとってうれしい? バレンタインデー。あなたにチョコレートはいくつ届いたろうか。今月は久しぶりにマスターズを彩るレジェンドたちを紹介。

2024年世界陸上・走高跳 カップルで優勝した福本夫妻

“おしどり夫妻”の福本義永さん、幸さんが2024年8月にスウェーデンのイエーテボリで行われた第25回世界マスターズ陸上競技選手権の走高跳でアベックVを遂げた。

真夏の日差しを浴びながら、走高跳のピットに立った福本夫妻。夫の義永さん(51歳)、幸さん(48歳)共に「ピットの踏切部分が軟らかくて、思い切った踏切ができなかった」の後に「記録が優勝かで、勝つことを心掛けた」と口をそろえた。

ご両人の思いどおり、義永さんは踏切に苦心しながら、1m85を3回目に成功して頂点に。幸さんも「海外の競技場のピットは固めが多いのに、こ

こは何で」と思いながらも、ノーミスで1m65をクリアして優勝を決めた。23年に脚の肉離れで苦しみ、24年のベストが1m66なので「ここで」と、バーを1m70に上げた。

1、2回目は失敗。最後の試技は惜しかったが、バーは落ちた。「残念ですが、仕方ありません」と幸さん。以前にも福本さんカップルを紹介したかもしれないが、もう一度ライトを当ててみよう。

16年に入会した年、オーストラリアのパースであった第22回世界マスターズに参加。義永さんはM40クラスの走高跳で2m02、幸さんはW35クラスで1m73を跳んでそろって優勝。マスターズ入会の門出を飾った。

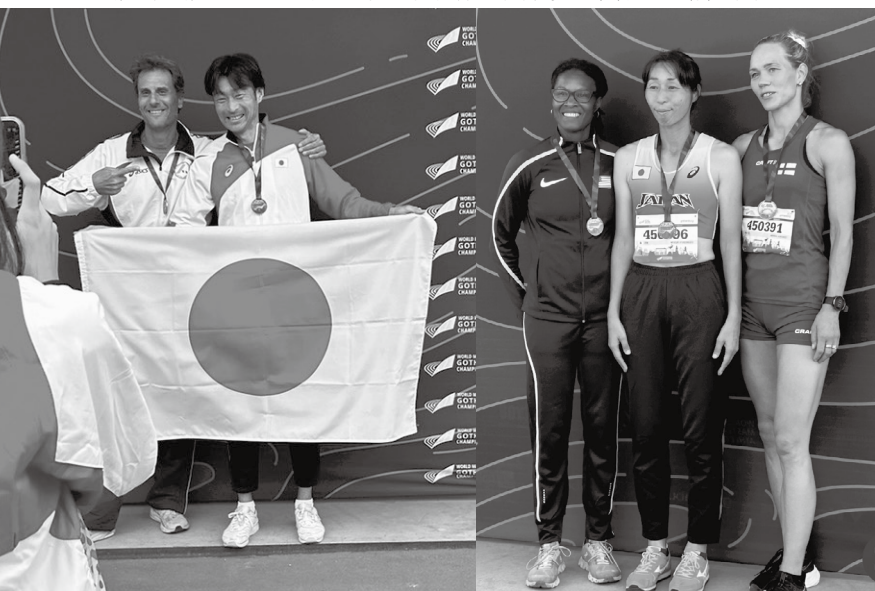
義永さんはM40クラスの2m02を振り出しに、M45クラス1m95、M50

クラス1m90と3クラスの日本記録を持っている。全日本マスターズでは入会した16年は、新潟大会で1m90の1位。ここでは幸さんも1m70でトップに。翌17年の和歌山での第38回大会では義永さんがM40クラスで再び1m90、幸さんはW40クラスとなり、1m70でまたも二人そろって1位に。18年に鳥取であった第39回大会は義永さんだけの出場となり、M45クラスで1m90の記録で勝った。同じ18年にはスペインのマラガで第23回世界マスターズが行われ、ここでも二人一緒に優勝した。M45クラスの義永さんは1m91、幸さんはW40クラスで1m73を跳んで世界マスターズ連覇を果たした。

幸さんは大阪・淀中の中学時代から飛び抜けていた。1991年の第18回全日中で1m73を記録して優勝。兵庫の夙川高へ進み、高3でのベスト1m81は全国トップ級の記録だ。甲南大から中京女大院へと学生生活を送り、インカレでは99年から3連覇を果たしている。卒業後、吹田一中(大阪)に奉職し、母校・甲南大陸上部で指導に当たるなどするなか、自らもピットに立った。日本選手権では高校3年時の94年に8位になったのを手始めに4連覇を含む6回の優勝。2019年まで出場を続け、年齢は不惑(40歳)を超えていた。

現在は学生の指導はしておらず、週1回、新幹線で岡山まで通い、耳に障がいのある佐藤秀祐さん(20歳)の指導に当たっている。岡山のリサイクル企業である平林金属株式会社に務め

第25回世界マスターズで2大会ぶり3回目の優勝を飾った福本義永さん(左)、幸さん(右)／福本幸さん提供写真





24年の日本デフ陸上選手権を大会新で制した佐藤さん。11月に開催される東京2025デフリンピックでの活躍を目指す／福本幸さん提供写真

ている佐藤さんは、聴覚障がい者を対象としている24年の日本デフ陸上選手権で大会新の1m95を記録して1位となった選手。佐藤さんは今秋、東京で開かれる世界デフ陸上で「2m以上を跳んで1位」を目標に掲げている。幸さんの念願も同じだ。平林金属の監督でもある幸さんは、自身の狙いについて「1m72以上」を。この記録は自身の持つW45クラスの日本記録1m68を超える。夫の義永さんは昨秋の兵庫マスターズの走高跳で1m91を跳び、自己の持つW50・1m90の日本記録を更新している。さらなる目標は「2m00」である。愛娘・光玖さんは今年中3。「全日中で1位!」が夢だ。実現に向かって精進を。

W60・200m、400mのエリート、有野敏子さん(61歳・東京)

東京に住み、「趣味は陸上」と語る有野敏子さん。「週3、4回」の練習のほか、余暇を生かして毎週土曜日に子どもたちを対象に陸上教室で指導している。全員で80人ほど、練習には「30～40人は集まる」そうだ。

有野さんは2024年にW60クラスの200mで29秒16を埼玉の競技会で、

400mで1分06秒58をこちらも埼玉の川口市民体育祭で出した。いずれのタイムも日本新記録で、200mの旧記録は29秒53。400mの方は有野さん自身が1分06秒58を出す前に、1分06秒76を出して、自身の持つ1分08秒43の公認日本記録を更新していた。

有野さんの前、同クラスの400mの日本記録は1分09秒58だった。有野さんがマスターズへ入ったのが「53歳だったか、54歳だったか」で、全日本マスターズに出たのが、コロナ禍前の19年、群馬での第40回記念国際大会だった。この大会ではW55クラスの年代。200m29秒88(+0.2)、400m1分08秒32で、いずれも2位。400mは大会新を出した。

昨年の2024年の第45回京都での全日本マスターズ大会ではW60クラスの200mと400mに出場。200mは29秒96、400mが1分07秒53の共に1位で両種目で大会新。これらの種目だけではない。4×400mRのW60クラスの新記録に挑戦する! というもの。マスターズ連合が発行している日本記録集によると、23年度版の4×400mRは5分08秒08(23年)が残っている。が、既に有野さんと共に集まったメンバーによるチームは、東日本マスターズ大会で4分57秒74の新記録で走っている。また、4×400mRのW50クラスでも仲間と共に日本記録を更新している。

有野さんの数年前を振り返ってみると21年、58歳では400m1分07秒93でW55クラスのトップ。800mでは2分46秒81でランク3位だった。W60クラスに上がった23年に60歳になると、100mは14秒47でランク4位だが、200m29秒79、400m1分08秒43でランク1位へ。1年後の24年は先述の200m29秒16、400m1分06秒58とタイムを上げた。

有野さんの旧姓は中村といい、出身は兵庫県。中学は神戸市の鷹匠中で陸上が強かった。有野さんは当時から今日のように「ダントツ」の強さを発揮し、中3の1978年、東京・国立競技

場であった第5回全日中の共通800mで2分15秒8のタイムで3位に入った。このレースで4位だったのが、今や陸上解説などテレビでおなじみの増田明美さん(岬中・千葉)で、2分17秒3でゴールしている。同年11月のジュニア五輪800mでは2分12秒7とタイムを上げて優勝。また、日本選手権では中学種目にはなかった400mに挑み、57秒11の中学新で5位に食い込んだ。このほか、200mでも25秒9と、飛び抜けた存在だった。

79年に武庫川高へ進み、高1で出場した滋賀インターハイでは2分11秒4で3位と健闘。高2になると愛媛インターハイの400mで56秒65の4位、800mで2分11秒7の3位に。中大進学後は故障で、スパイクの跡は途絶え、マスターズへ入会するまでは鳴りを潜めた。50歳を過ぎたところから往年の頃の血が騒ぎ出し、陸上を再開。一度スパイクを履くと、そこは昔取ったきねづか。次第にパワーを取り戻し、24年は中・高時代に勝る活躍を見せた。今後、W60クラスの目標については「200mは28秒台、400mでは65秒台」。目標達成へ頑張っている。

昨年のNAGASEカップでの有野さん(左)。高畑志野さん(中)と田中麻理さん(右)は複数のマスターズ日本記録を持つ／有野敏子さん提供写真

